

## 虹に寄せて

田渕直子

北星学園大学  
経済学部教員

昨年の夏、フィリピンですばらしい虹にめぐり会った。日本に本部のあるキリスト教系のNGOに「地域開発支援で協同組合方式を取り入れ、うまく行ってる所があるから、見に来ないか？」と誘われてのことである。私は欲張りで貧乏性なので、現場に行けるチャンスと断ることはとても出来ず、帰国翌々日から他大学で集中講義があるという無謀な日程にも関わらず、フィリピン中部の島に向かうことになった。出発当日にマニラのホテルをフィリピン国軍の不満分子が占拠し、クーデターもどきを演じて見せるというおまけまで付いたが、マニラは極めて平穏で「よくあることだから」と現地スタッフに笑顔で迎えられたことが、まずはカルチャーショックであった。

フィリピン中部では、2カ所の地域支援センターを訪問した。いずれもローカル組織（スタッフはすべてフィリピン人）が、日本のNGOが支援する国際里子とその家族を組織化しており、日本のNGOは間接的にその組織を支援する形である。1カ所はしっかりした教会を基盤としたセンターであり、クレジットユニオンを長年運営してきた実力・幼稚園経営の実績を持ち、アメリカとドイツのNGOの支援も取り付けているという天晴れな組織であった。日本のNGOからの基金を活用したMultipurpose Co-operativeは、このセンターの一部であり、まだ信用事業だけを営む小さな組織である。信者だけを対象とした純粋な相互金融組織であるクレジットユニオンと異なり、地域住民のスモールビジネスを積極的に支援しようとする開かれた組織と表現できよう。数人のスタッフは全員女性、当方も「日本のおばさん」として、すぐにリラックスした雰囲気（霧）の小さな事務所に馴染んでしまった。さらに、地域の中には国際里子のお母さんたちだけで構成されるParents' Groupもあって、当座の生活資金（例えば急病時の薬代）の需要に応じる「講」が組織されている。当方がお土産として持参した共同作業所製品「刺し子の布巾」を手に、皆で頭を寄せ合って、その作り方をああでもない、こうでもないとしやべりあっている様子は、生活を支え、創っている人々の万国共通のゆるぎなさを感じさせるものであった。

上のセンターが市街地を中心に活動しているのに対し、もう一つのセンター（正確にはサブセンター）は離島の農漁村を基盤とし、

コミュニティの活性化、特に児童育成を主眼としていた。このサブセンターには、私の所属する大学が支援中の国際里子がいるので、中学(フィリピンではHigh School) 1年の彼に会うことも大きな目的であった。

小船で島に渡り、彼の通学している学校に挨拶し、初めて本人にも会ったが、日本の同年代の子と比べると2～3歳小柄な体格に、現実をはっきりと認識させられた。サブセンターを見学したり、地域のスモールビジネスとして取り組まれているかんきつ類(カラマンシー)のジュースをご馳走になったりし、最後には彼の自宅で大歓迎を受け、夕刻に島を去ることになった。ところが、帰りの小船のエンジンが不調である。何度、スターターの紐を引いてもエンジンが一向にかからず、一度、小船を降ろされる羽目となった。そのうちにスクールにも見舞われ、散々な状況で小一時間の足止めを食った。

ようやくエンジンの修理が終わり、船に再び乗り込むころには空が急に晴れ、前方に夕焼けが広がった。南の海、船の向かう方角に金の夕日が落ちようとする間際、後方、今、あとにした小島からまさに虹が立ったのである。私はクリスチャンではないのだけれど、これは神様のGiftであると素直に思ったものである。

残念ながら、虹まではカメラに収められなかったが、前方の日没は「絵葉書もこれまで」というほど見事に同行の大学院生がデジカメでキャッチし、常時持ち歩く私のノートパソコンの「壁紙」(最初の画面)になっている。日ごろの講義でもこのノートパソコンからいろいろなものを映しては学生の気を引いているので、講義履修者にもお馴染みのはずである。しかし、この日没を見て、脳裏に虹が浮かぶのは私だけである。虹は希望の象徴なのだから、これをカメラに入れられなかったことは、実は幸いなことであったのだろう。ICAのシンボルの戯画化された虹は、場合によっては薄っぺらく見えてしまうけれど、脳裏の虹はますます見事になるばかりだからである。

逆説的であるが、消えてしまう、現実には辿り着けない虹であるからこそ、希望のしるしですっといられるのである。先の教会系ローカル組織も職員の不正問題で実は悩み続けているのであった。「協同の発見に出かけて本物の虹を見た」なんて、あまりにも出来すぎているのだけれど、これはほんとうの話である。